HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	「絵に見る武四郎の交流」
著者	霜村，紀子；SHIMOMURA，Noriko
引用	北海学園大学人文論集(65)：51-57
発行日	2018-08-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

「絵に見る武四郎の交流」

霜　村　紀　子

○霜村氏　皆様，こんにちは。国立アイヌ民族博物館設立準備室の霜村と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今回事前に，若い方が中心と伺いまして，パソコンを操作されながら聞く方もいらっしゃるかと思い，配布物に紹介する資料を所蔵する図書館等の URL を中心に書かせていただきました。函館市中央図書館，北海道大学附属図書館など各図書館で，貴重資料をデジタル化し，全ページを公開という取組みをしています。今回，紹介できる画像は時間的に限りがありますので, お時間のある方はお家に戻られてから, このようなページをゆっくり見ていただければと思います。

私は美術担当なものですから, 絵画のほうから武四郎の交流, ネットワークということで何か探れないかと考えてみました。武四郎については，三浦さんが今までご紹介されたように，探検家として，膨大な日誌，地図を作成されたということ，報告書を 150 冊近くまとめたということ，北海道の名づけ親ということ，皆さんご存知のとおりのイメージしかありませんでした。

絵画の面では，武四郎はたくさん絵を描いています。函館では，市立函館博物館所蔵の〈蕗下コロポックル人の図〉という函館市指定有形文化財があり，この絵画がとても私には印象深く，このイメージが頭に浮かびます。落款を見ていただくと,「北海道人絵」, 印が弘（ひろし，ひろむ），武四郎ではなく成人後の名になっており，50 代以降の作品とされています。武四郎さんは絵が巧いのか下手なのかというのは，正直この絵だけではとても判別がつかない。ただし，ご覧いただくと，とても筆がなめらかで，すっとした勢いで描かれていて，墨の使い方がとても上手なのです。濃淡

を含めまして，さらっと淀みない筆でフキの特徴を捉えて，フキの下から顔を出している，コロポックルと言われる小さな人物たちがとても愛きょうのある表情に見受けられます。武四郎の絵画について，野帳に描かれたスケッチは大体年代などがわかります。ただし，日本画としてのものは，きちんとした年代や印章，変遷ですとか，今のところはまだまとまっていないと思うのですけれども，これが今後の課題かと，武四郎を絵師として見るという観点も一つはあるのではないかと思います。

武四郎自身の画業については，武四郎の資料を整理された安村敏信先生は，たくさんの絵師たちと交流があったということを紹介されたうえで，画家に就いて画業を学んだわけではないと書かれています。私も，武四郎は誰から絵に関して手ほどきを受けたのだろうかと，今回調べてみたのですけれども，特に，誰に習ったとかということはなく，たくさんの画家，文人たちと交流はしているのですが，特定の人はいまだ見つかっておりません。これに関しても情報がありましたら，ぜひ教えていただきたいところです。

描き残した作品は，今見ていただいたように，とても愛らしい，そして絵画としても成り立っているものもあると言ったほうがいいでしょうか。安村先生は，武四郎の中でもアイヌ絵というものが一つ評価されるところであろうとしています。アイヌ絵を描いた画家はたくさんいて，十勝場所を訪れた平沢屏山などが有名なのですけれども，武四郎のアイヌ絵は，俳画風の趣があっておもしろい，そして，アイヌ研究者の目が光っているので，行事や風俗の描写が正確であるという位置づけをしてくださっています。

また，先ほど三浦さんが紹介された野帳のスケッチや，今そちらのケースに展示されている資料に関しても，地形をとったもの，実際自分が見て歩いた地形図に関しては，とても描写が細かくて，巧みだと思います。鳥瞰図的に描いたものは，やはり幼少期から名所図絵などを見て，自分でそれらを参考にしてきたところがあると思われ，それぞれの土地の特徴や名所史跡をとらえつつ，地形についても，多少デフォルメしているところは

ありながら，とても技量があって，構図のとり方も巧みだと思いました。

例えば，こちらの〈厳島神社の境内の図〉ですけれども，八幡宮などの記載に関しては文字で細かく書き残して，さらに，地形や建物の配置図などをこれほどまで正確に描けるのであれば，普通の絵描きの技術を超えている。これだけのものをさらさらとその場で描けるということは，かなりの技量があると思われます。

そして，アイヌ絵といいますと，皆さん札幌の方は十分ご存知だと思うのですけれども，アイヌが描いた絵ではなく，アイヌの生活や風俗を表現した絵画の総称となっています。それを短く縮めましてアイヌ絵と呼んでいます。

武四郎の絵画に関しては，やはりアイヌの文化に深く傾倒していますし，それに基づいた絵画資料ととらえて，価値あるものと思われます。ただ，アイヌ絵であっても美術的価値は少ない場合もある。逆に美術的に優れていても，裏付けや中身にアイヌ文化に関する情報力がないものであれば，アイヌ絵としての価値は劣るという評価になる，この点は私もとても同意しているところです。越崎宗一さんが書いておられるのですけれども，この意識を常に持ちながらアイヌ絵というものを見ていかなければならない。そのうえで，絵画だけではとても読み解けないところがあります。三浦さんや松本さんのように，情報源，書簡類ですとか，バックデータがなければ正確に絵画を読み解くことはできないと考えています。

函館市中央図書館にあります〈黒百合〉の図を見ると，ただクロユリが一輪描いてあると思われるでしょう。日本画の花鳥画，花を中心に描く場合は，例えば牡丹が正面を向いて満開で，色彩豊かに描かれているものを思い浮かべます。けれども，この絵は，蝦夷地の探検で見たクロユリをさらっと描いたもので，どういう特徴なのだろうかと思いながら眺めていました。どの点にポイントがあるかというと，本草学，今で言うと植物画などは，花が紫で根の部分，植物を描く時は根っこまで描きます。けれども，普通の花鳥画のときは花がメーンで，見る人の正面に向けて描かれ，鑑賞用の芸術性を求めた絵画が中心です。この場合，大事なことは，北海道大

学附属図書館所蔵の〈蝦夷漫画〉に同じくクロユリの絵が出てきますが，「其花紫紺色，処々に有土人此根を喰料とす」と記されており，蝦夷地にはとても多くあって，先ほど松本さんが話されていたように，アイヌはこの根を食料として食べるわけです。だから，〈蝦夷漫画〉ではここにあえてもう一度，「黒百合の根」と表記している，こういったところが情報源としても，とても大切なのではないかと思われます。

その上で，函館市中央図書館所蔵の松浦武四郎が書いた〈蝦夷島奇観〉を見ていこうと思います。これが本当に武四郎なのかと，先ほど話題になっていたところです。上下巻に分かれておりまして，かなり荒々しい感じで描かれているもので，本当に雑な感じがして，先ほどの絵とは全然タッチも違うように思うのです。このようにいくつか見ていきますと，武四郎の晩年の〈大台山頂眺望之図〉や，先ほどの〈新板蝦夷土産道中寿五六〉の絵なども，人物の表情は小さくて，ラフに描かれているのですけれども，特徴的な事柄をとても愛きょうある表情で描かれているものが多いのですが，これは，顔を見ていっても，その辺も読み取れない部分があるのです。年代的には，一番最後のページに，年代があり，弘化4年に，江差の仮の住まい，僑舎において，雲庵先生の求めに応じて武四郎が描いたと識語があります。これは年代も描かれた場所もはっきりしていまして，30歳ごろの絵になるので，晩年の絵とは多少タッチが違ってもいいのか，もしくは仮り住まいで，旅先で描いたものだから，そういった条件も考慮していいのか，今後の課題だろうと思います。武四郎の自伝や，松本さんが調べられたメモ帳（交友名簿帳）などから，これに関してすぐ裏付けがとれるのではないかと考え，雲庵先生というのはどなたなのだろうと調べてみました。このときの自伝によれば，西川春庵の下僕となり，雲平と名乗ってカラフトについていき，弘化3年には，江差で頼三樹三郎らと百印百詩の会を行い，この〈蝦夷島奇観〉が描かれた弘化4年の初春の中澣，1月11日から20日の間，ちょうど江差に滞在している，自伝の記述と識語が合致するのです。ただし，雲庵先生とは誰なのか，誰の蝦夷島奇観を写したのか，武四郎が持っていたものなのか，その地にあった蝦夷島奇観なのかという

こと，これらに関してはまだ背景がはっきりわかっておりません。西川春庵，雲庵という人物についても，一つには，武四郎が雲平を名乗っていたので，春庵先生と雲平を組み合わせたものなのかと推測したり，または，松浦武四郎記念館に，武四郎と交流のあった方のサイン帳のような〈渋団扇帖〉があり，その中から名前を拾いますと，吉沢雪庵，横山雲庵という名前が出てくる，彼らはどうなのだろうかと推測したり，誰のために書いたのか，そのあたりは，今回，逆に謎が深まってしまいました。三浦さん，松本さん，おふたりのまとめられたネットワークの中から一生懸命名前を拾っているのですけれども，そういった記述があればと思い，探しておりました。

そこから，弘化年間という時代には，蝦夷地に，後々アイヌ絵師として知られる人々がたくさん渡ってきている。平沢屏山，早坂文嶺という，林昇太郎さんが研究されていたアイヌ絵の絵師たちが渡ってきた時代なのです。松浦武四郎と彼らは交流があったのか，武四郎と会うことはあったのか，〈蝦夷島奇観〉などを彼らと共有し，見せ合ったりすることはあったのかということが気になってきまして，少し調べてみました。

早坂文嶺は，函館市中央図書館所蔵の〈神仙図〉，市立函館博物館所蔵の〈アイヌ狩猟図〉を見ていただくと，このように，わりとさっぱりした絵なのですが，実は絵馬や仏画などはしっかりした日本画を描かれたということで，今，北海道博物館で早坂文嶺の〈蝦夷島奇観〉がちょうど飾られていまして，現物を見ることができますので，どうぞお出かけください。

平沢屏山に関しては，市立函館博物館に７月から12月まで，アイヌの生活を表現した絵画〈アイヌ風俗十二か月屏風〉がありまして，これが集大成的な作品です。

武四郎とこのようなアイヌ絵を描く方たちと交流はあったのかということで調べていきました。まず，〈交友名簿帳〉に「最上山形　文嶺」，それから自伝のほうに，弘化２年10月，「羽州より文麗等云画師も来り居たり」とあり，羽州より文嶺という絵師も来ている。書かれている人名の漢字は違うのですが，羽州は山形ですし，最上山形の文嶺というのが，まさしく

文嶺ということで，早坂文嶺とは，どの程度かわかりませんが，面識があったということが考えられます。今後はその点も，調べていくきっかけとなればと思っております。

それから，武四郎と同時代，〈夷酋列像〉を描いた蠣崎波響はもう亡くなっているのですけれども，その息子や弟子たちの時代になっており，彼らとも何か交流があったのではないかと考え，自伝や名簿帳で名前を拾っていきました。息子の蠣崎波鶩（松前藩の家老を務める）と弟子の高橋波藍（松前藩士）の２名の名がありました。

〈交友名簿帳〉に高橋波藍は「三味線堀松前邸　高橋波藍」，江戸の松前邸のほうにおりまして，後々松前に戻っているのですけれども，この記述がありました。自伝のほうに，弘化４年，エトロフ島に北アメリカ人が漂着したときに，蠣崎将監という年寄り等が立ち会ったとあり，恐らくこれが波鶩ではないかと思われます。

それから，安政２年，種々の悪事を行った人物として，高橋波藍とあります。このように名前を拾いまして，彼らとも，もしかしたら面識があったり，交流があった可能性も考えられます。

波鶩は，親の波響を超えられなかった絵師で，あまりアイヌ絵は確認されていないようです。高橋波藍は，京都画壇の影響を受けたような日本画を描いていますが，今，北海道博物館で展示されています弥永コレクションの絵が，実は夷酋列像のポロヤを描いたアイヌ絵なのです。今，北海道博物館では，まさしくこの時代の文嶺，波藍の実物が展示されているということで，見応えのある内容になっています。

高精細のデジタル画像を見るのも良いのですけれども，やはり本物を見て，筆致，タッチですとか，そういったところを読み解いていく必要があるのではないかと思います。そして，さらに文献的な裏づけをとるということが重要です。

もう１人，最後にこれだけ触れていきます。武四郎から情報を得て，アイヌ絵を残した作家としまして，富岡鉄斎がいます。彼は文人なのですけれども，北海道に来る前に武四郎を訪ねて話を聞き，事前に〈蝦夷行程記〉

などを読み，北海道のいろいろな情報を仕入れ，北海道を周遊して帰っていきます。戻ってから松浦主人に会い，横山湖山，さきほど話が出ていた小野湖山，田崎草雲らも来て，夜通し語ると，このようなネットワークが見てとれます。ですから，文書にみるネットワークと交友，今後，アイヌ絵の研究の課題としても取り上げられると思いますので，三浦さんにもまたご協力をいただきたいと思います。

駆け足ですみません。どうもありがとうございました。（拍手）